OPINIONS

昭和大学藤が丘病院外科に来て

昭和大学藤が丘病院外科
日比 健志

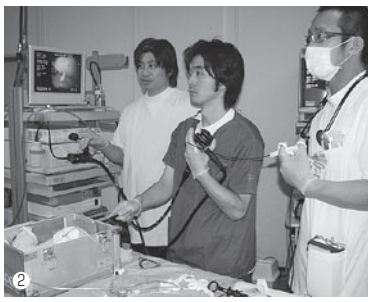
私は20年近く名古屋大学消化器外科にお世話になっておりましたが、縁あって３年ほど前に初めて、横浜にある現在勤めております昭和大学藤が丘病院に赴任して参りました。赴任当時は知り合いもなく、勝手も分からず、神経のすり減る毎日でしたが、素晴らしい外科医局員と温かい周囲の皆さんのお陰で、今は楽しく過ごさせていただいています。2008年４月からは外科の責任者となり、浅学の身である私にとって仕事をこなして行くのはますます難しくなっていますが、やり甲斐のあることと考えて自分の能力の及ぶ限り頑張っています。

昭和大学藤が丘病院外科は、大きく分けて、消化器・一般外科、乳腺外科、小児外科に区分されます。私自身は下部消化管および肛門の外科を専門として参りました。大腸癌の手術、化学療法は言うに及ばず、炎症性腸疾患の治療についても貢献してきたものと考えています。現在は外科医長として、これらの仕事をさらに押し進めることはもちろん、その他の消化器疾患についても研鑽を重ね、常に最先端の医療を供与して行きたいと考えています。2008年の消化器外科の手術件数ですが、上部消化管手術が64例、下部消化管手術が211例、肝胆膵手術が150例となっています。中でも鏡視下手術の占める割合が徐々に増加しており、腹腔鏡下の胃切除が11例、大腸切除が48例となっています。今年はさらに増えるものと期待しています。

しかし先端医療ばかりを追い求めると、ややもすれば患者様のニーズを見落としたり見失ったりすることがあります。私は常々医療というものは、患者様と医療関係者との間に構築される信頼関係の上に成り立つものと考えています。自分も含め外科医局員には、まず患者様とのコミュニケーションを緊密に取ることが第一と教育しています。われわれはこうした全人的な医療を供することにより、患者様からは常に高い信頼を勝ち得ているものと自負しています。

近年、全国的に外科医不足が取り沙汰されるようになってきました。これは取りも直さず外科医の仕事には、手術やその後の患者管理といった高度な技術を要するものが多く、しかも拘束時間が長いうえに緊急の診療も多いといったことが挙げられます。しかしながら医師の本来の使命である、病気を治すよう患者様のために尽くす、という観点から言えば、外科の診療はまぎれもなくその使命に直結していると自負しています。こうした医師の基本的資質を教育し、患者様のために尽くせる医師の育成に尽力してきましたし、これからも続けて行きたいと考えています。

われわれの研究について述べさせていただきます。自然科学の爆発的な発展により、基礎医学と臨床医学の垣根がしだいになくなり、今や医学全体が生命科学という広い観点からとらえられる傾向にあります。実際、近年トランスレーショナルリサーチという分野が確立され、基礎的な研究の成果が実際に臨床応用されるようになってきています。しかし、一般的に考えると、外科学を志す者はまず優れた臨床医になることを志していると考えられま



写真①　後期研修医指導の手術風景
写真②　模型を用いた胃の ESD 訓練
写真③　定期的に開催している研修医・学生向き縫合実習
写真④　実験風景
写真⑤　外科医局全体写真（中央前列ネクタイをしているのが著者）

すので、まずは手術手技や術後管理などの外科医としての基本を学ぶことが最優先と考えられます。しかしながら、大学は常に世の中の最先端の仕事をしなければならないという使命を考える時、次には基礎や臨床研究を学ぶ必要があると考えられます。外科系の専門医を取得するために何本もの論文が必要とされることも、その反映と考えられます。自分がこれまで行ってきたトランスレーショナルリサーチを具体的に分かりやすく教育することが、最先端の医学への興味を惹起し、優れた人材の育成に寄与できるものと考えています。もちろん、最先端の医学教育を重視しすぎると、頭でっかちの人間性の欠落した医師を生み出す危険性があることも常に念頭におきたいと考えています。サイエンスに基づいた医療を実践でき、かつ人間性豊かな医師を育てるために努力したいと考えています。

また私は、外科医としてそして研究者としてさまざまなタイプの固形癌に携わってきましたが、私が癌の研究をしている最大の目的は、常に癌患者の診断や治療、予防に、研究の成果を直接役立てて、その癌の根治に寄与することにあります。その点で臨床と研究のどちらも行うことのできる大学という環境にあっては、臨床に即した高度なトランスレーショナルリサーチを展開できるものと大いに期待しています。そして、研究成果を臨床に還元して行くことを目指すうえで必須な、臨床部門と基礎部門との円滑な連携の醸成を含め、これまで基礎と臨床の両方に携わってきました私の経験は、大いに役立つものと信じています。

最後になりますが、われわれの外科は今まさに発展途上にあると考えています。皆様の御指導・御鞭撻が、より良い方向に進むための道標になると考えます。何卒今後とも宜しくお願いいたします。